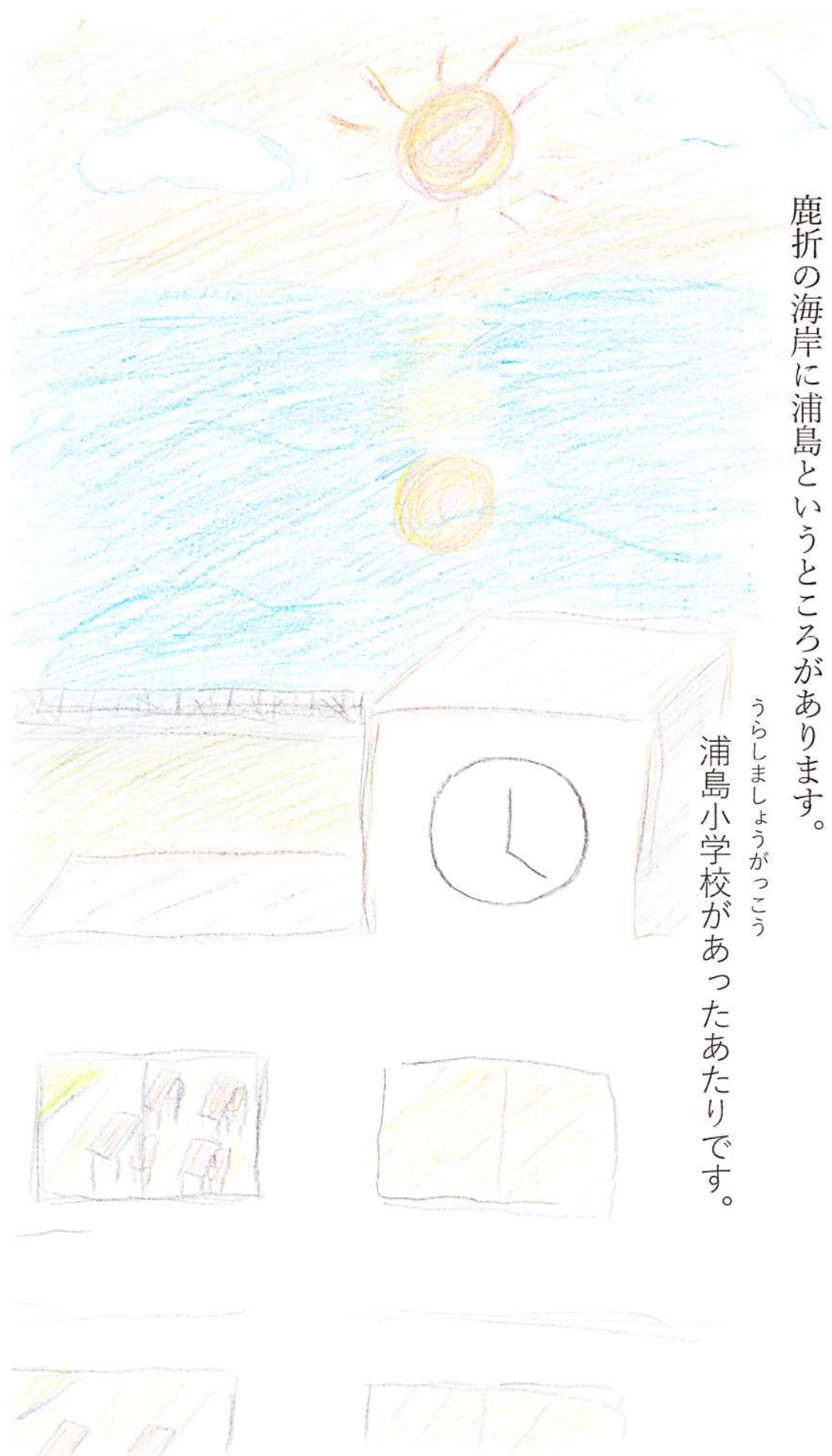


ししおり かいがん うらしま

鹿折の海岸に浦島というところがあります。

うらしましょうがっこう

浦島小学校があつたあたりです。



その浜辺に、大変漁に熱心で、心優しい、

はまべ

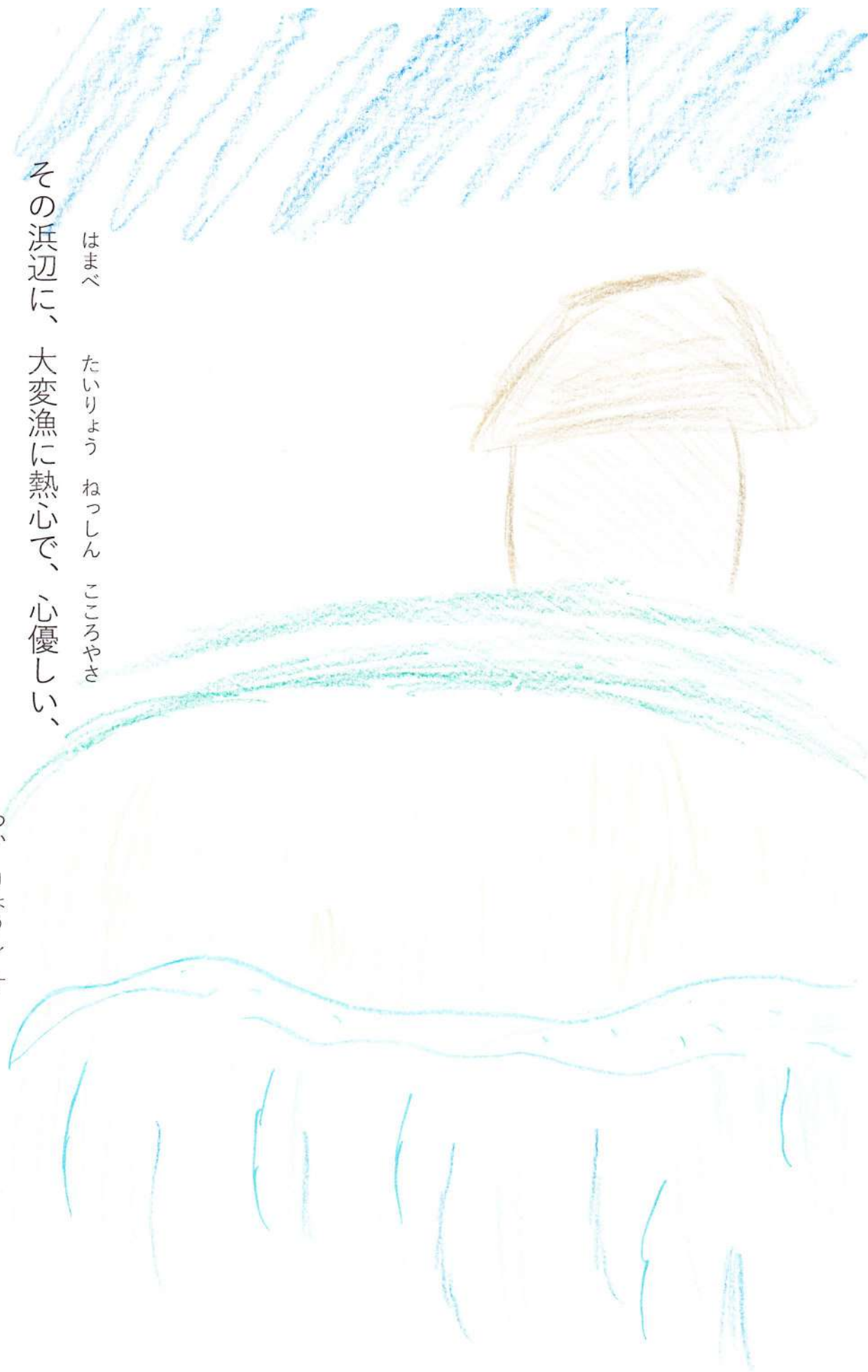
たいりょう

ねっしん

こころやさ

わかりようしす

たくましい若い漁師が住んでいました。



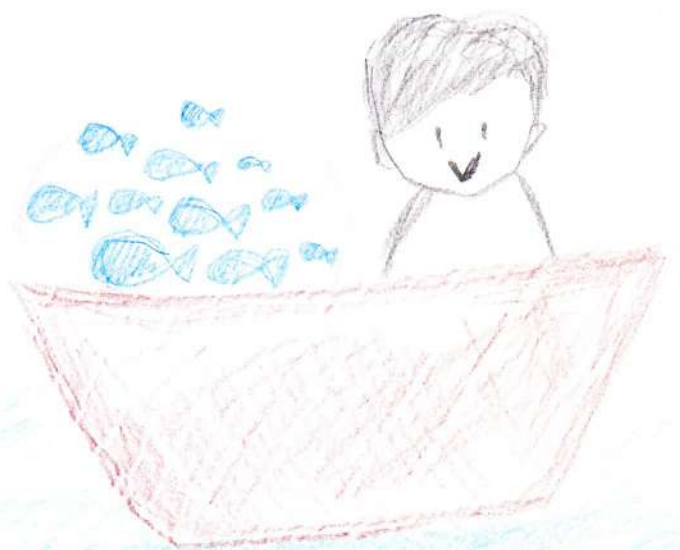
わか りようし あめ ひ
その若い漁師は雨の日もすこし海が荒れていても、



いっしょうけんめい ふね

さかな

ぎょじょう おおしまりゅうまいざき おき



一生懸命船をこいでとても魚のとれる漁場の大島竜舞崎の沖まで行って、

たいりょう かえ

し

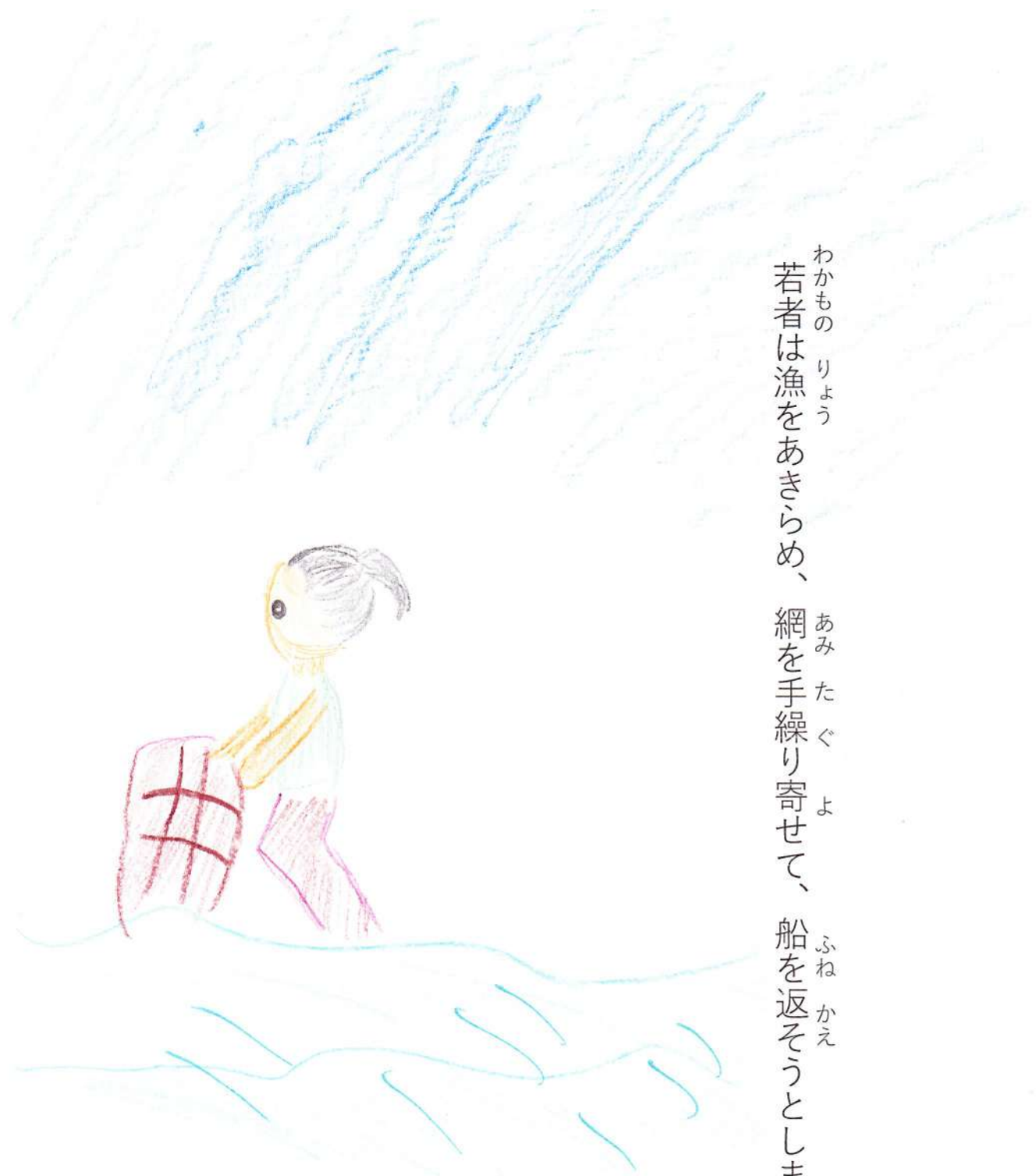
いつも大漁して帰ることで知られていました。

ひ あかつき うみ こ だ りよう せい だ
その日も暁の海に漕ぎ出し漁に精を出しておりましたが、

どうしたことが魚がとれませんでした。
さかな



わかもの りよう
若者は漁をあきらめ、
あみ たぐ よ
網を手繰り寄せて、
ふね かえ
船を返そうとしました。



とき いなびかり
その時稲光がきらめいて、
なみ いっしゅんあか
波が一瞬明るくなった中に、
なか

なみ
波にもまれている小船が見えました。
こぶね み



そればかりか、
あさ
朝はとてもよく晴れわたっていた空が、
は
そら

くも
曇ってきて沖から大きな雷が響いてきました。
おき おお かみなり ひび



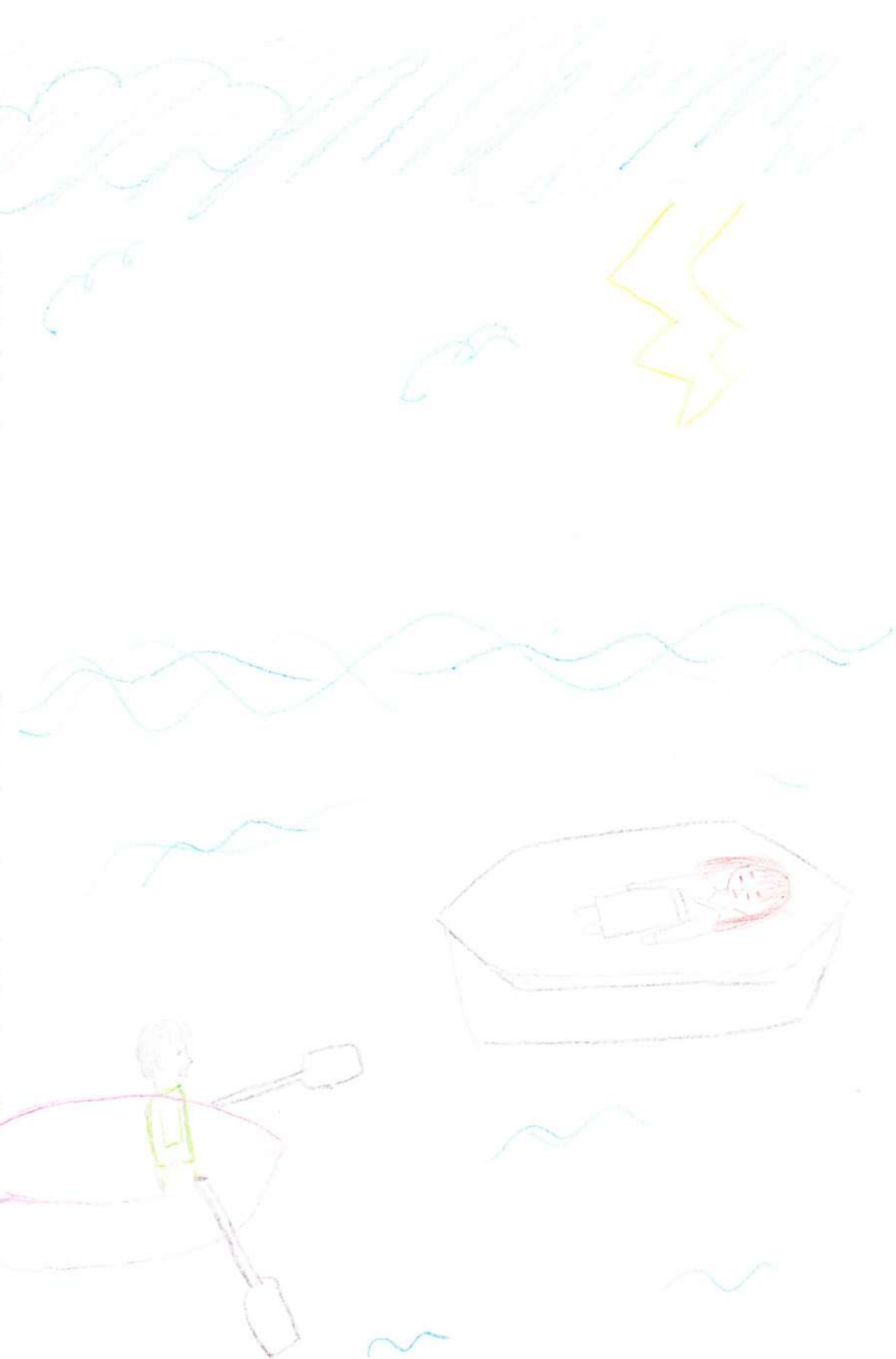
わかもの
若者は、

「どこの船ふねだろう、波なみにのまれてしまいかもしれない。」

と思い、

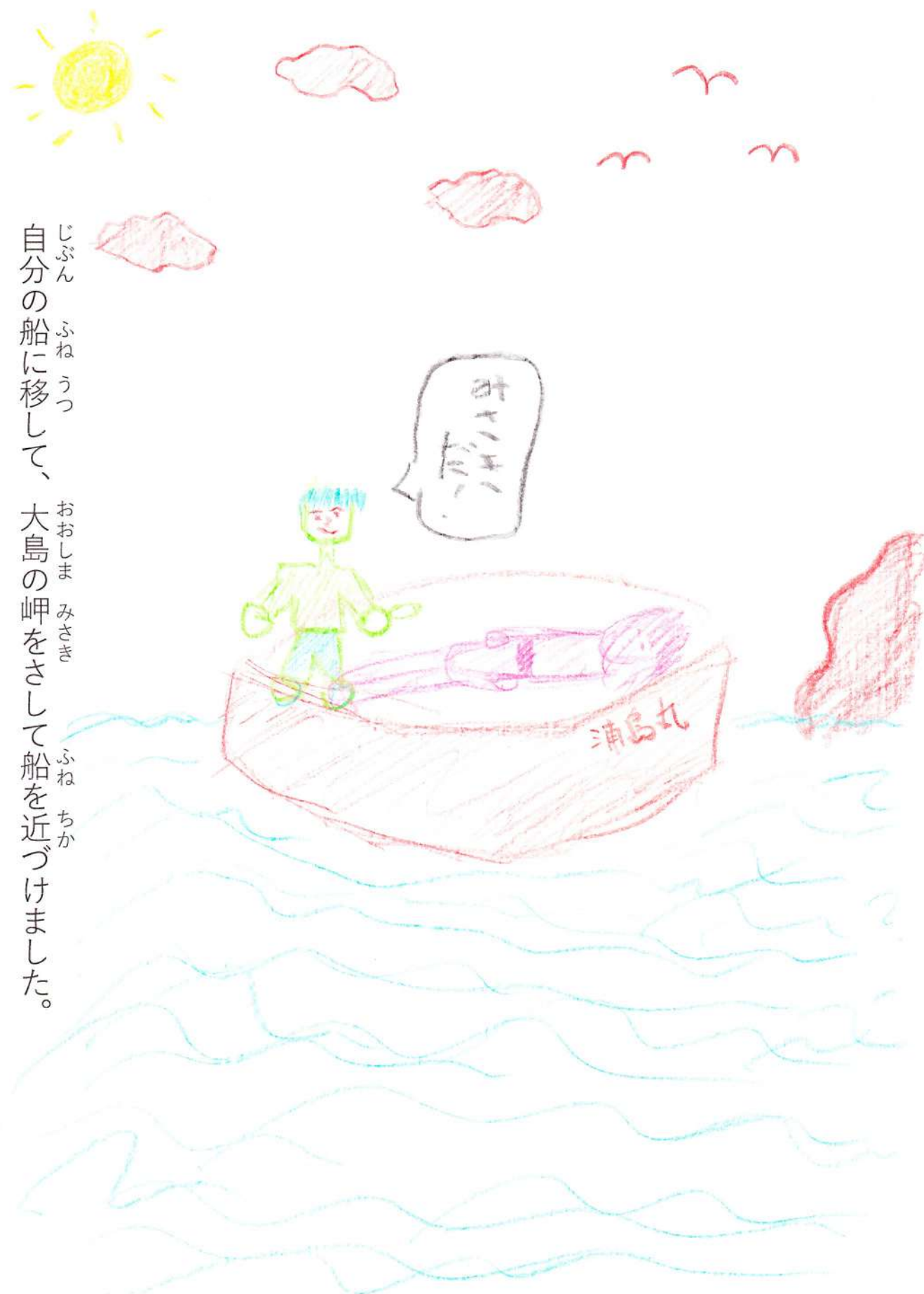


たかなみ なかちから
高波の中力いっぱい漕いで小船の中を見ると女の人が倒れていました。





わかもの むちゆう みずびた
若者は夢中で水浸しになっている小船から女の人を助け出し、



じぶん ふね うつ
自分の船に移して、
おおしま みさき
大島の岬をさして船を近づけました。

きうしな おんなひとわかものちか どうくつ
気を失っている女の人を若者は近くの洞窟のそばへ

なみうよ あいま のつ
波の打ち寄せる合間をみて乗り着け、

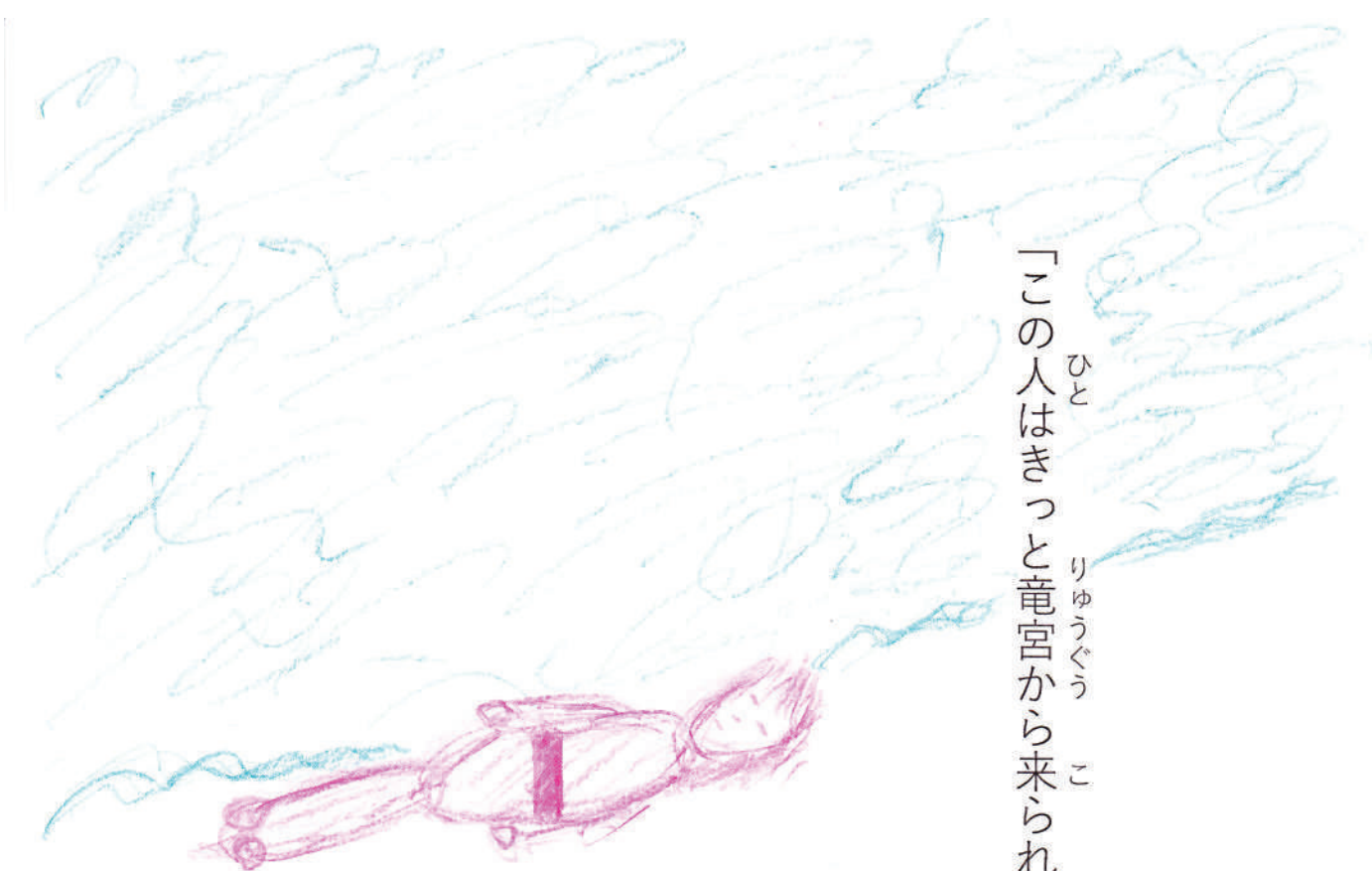


いわたなひ あ かいほう
岩棚に引き上げて介抱しました。

いきふかえ きつひと
ようやく息を吹き返し、気が付いたその人は、

わかものいま み うつく ひめさま
若者が今まで見たことのないような美しいお姫様でした。





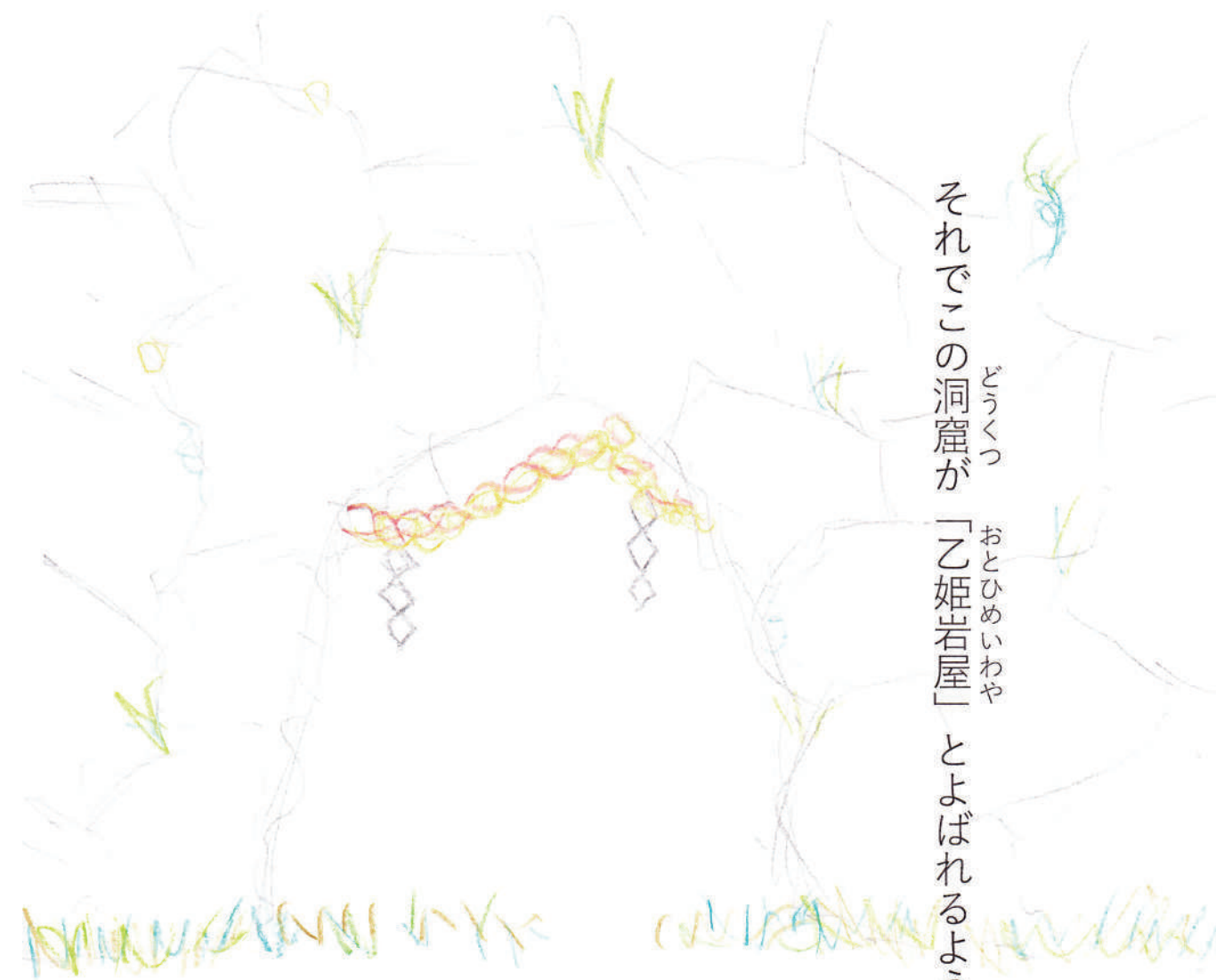
ひと りゅうぐう こ おとひめさま
「この人はきつと竜宮から来られた乙姫様だ！」

わかもの しん
と若者は信じていました。



ひめ わかもの たよ
それから姫はやさしい若者を頼りにし、
わかもの ひめ たいせつ あい
若者も姫を大切に愛して、

どうくつ すえなが なかよ く
この洞窟で末永く仲良く暮らしたということです。



それでこの洞窟が「乙姫岩屋」とよばれるようになります

今でもそうよばれています。

「乙姫岩屋」だねー

